かささぎ 通信 第28号

2014年10月10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一四年九月の「森三郎の作品を読む会」では、
「猿酒」（『赤い鳥』昭和8年3月号初出）
「雪」（『赤い鳥』昭和8年4月号初出・
『森三郎童話選集　夜長物語』所収）を読みました。

「猿酒」

「猿酒」は秋の季語になっている言葉ですが、「猿酒」について、森三郎さんはこの話の中で、次のように説明しています。

「昔から聞いている話に、山の中で、猿が木の実、草の実なぞを岩の穴へどっさり集めたくはえることがある。そこへ雨水がたまって、実がとけくづれ、ひとりでにお酒になることがあると言ひます。これがそれなんだなと感づいたのです。」

主人公のおじいさんが、親類からもらったそば餅を食べていると、そば餅の一つが谷間に転がっていきました。谷底を見下ろしたおじいさんは、そこで「猿酒」を発見し、話の種にと、ごくりごくり飲むうち、いい気持ちになって寝倒れてしまいます。気がついて見ると、「猿酒」を飲んだおじいさんは猿の姿になってしまい、猿と暮らすことになります。ある日、おじいさんは、猿が「あけてはいけない」と言っていた戸をあけてしまい、自分の家につながる井戸の底におばあさんの機織りの姿を見つけました。しかし、すべては夢で、心配したおばあさんが探しにきた声で目覚めると、転がっていったはずのそば餅はちゃんと膝の上の紙の中に入っていました。

この話は、いくつかの昔話のモチーフで構成されている、滑稽譚で、おじいさんやおばあさんのやりとりに、会の話も盛り上がりました。

森三郎さんには、最初の「赤穴宗衛門兄弟」や、「ゆめ買い」「柏野大納言」「虹の松原」など、これまでにもいくつかの夢の話がありました。その中でも、一炊の夢の構成としては、「夜長物語」とこの「猿酒」が一番似かよっているという分析も、「作品を読む会」の当日の話の中で出てきました。

「雪」

主人公弘は、小学校六年生。昨年お父さんをなくし、お母さんと二人暮らしで、郊外から省線に乗って、市内の今までの学校に通っています。十二歳ぐらいの少年の、親離れする前の、甘えと、親への反抗心という揺れ動く心理がよく描かれている作品で、会のメンバーの中にも、森三郎作品の代表作として推す人が多い作品です。

文章構成も起承転結がはっきりしていてよくできている、という感想もありました。

朝から、傘をもっていくかどうかで、登校の時から弘は母と気持ちの行き違いがありましたが、お弁当の包みの中に箸がなかったこと、下校の時に吹雪になりだしたのに、期待した母が駅にいなくて、傘がないまま、家まで走って帰って、怒りを母にぶつけたことと、弘の心理を追う一日が描かれた作品です。

「カラリとした冬晴れのいいお天気」が「いつの間にか日がかげって、雨にでもなりそうな空模様」に変わり、「なまり色の空から、灰のような雪がチラチラ降り出し」「雪はもうもうとふりしきり、三間先は見えないくらい」という天候の変化の描写が、弘の気持ちと重なって、効果的だという感想も出されました。

「かささぎ通信26号」でも、十二歳の少年の心理を扱う作品について触れましたが、森三郎作品の興味深いテーマです。

○ 次回予定　11月14日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年5月号初出作品

「小猫」・「銀作」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）・「パチンコ」